

【研究報告（2019年度）】

チーム① 妊娠・出産及び子育て期の子どもといる生活の研究チーム 「こどもといる生活」を共に支えあう子育て力・地域力の創出

廣瀬伸一^{1,*}、野村優子¹、太田栄治¹、藤田貴子¹、石井敦士¹、塚原ひとみ²、宮城由美子²、
佐久間良子²、小柳康子²、長谷川珠代²、松本祐佳里²、藤原悠香²、古賀 綾²

1) 小児科学、2) 看護学科、*) チーム責任者

1. 研究の目的

地域・家庭の子育て力を強化し、妊産婦・育児期の母親の孤立化を防ぎ、就学前の「こどもといる生活」を地域で支えることを課題として、①ハイリスク妊産婦とその家族を対象とした支援講座を通して子育て力の強化を図り、ハイリスク児を出産した妊産婦の抑うつ・不安傾向、育児困難、赤ちゃんへの気持ちなどの継時的な変化を探索する。②保育所の看護師及び保育士を対象に、子育て支援技術の段階的研修を展開し支援技術の評価を行い健康支援対応力の向上を図る。

2. 研究実施計画

1) 妊娠・出産・産褥期における実施計画

①孫育て・子育て講座：

総合周産期母子医療センター産科部門との協働による本講座は、4年目を迎えた。毎月第4土曜に開催し年間12回開催予定であり、1月までの受講者は93名であった。参加者の内訳は母親42名（45.2%）、父親14名（15.1%）、祖母30名（32.3%）、祖父6名（6.5%）などであった。土曜午後の開催は参加しやすく、実施の全ての内容（今どきの子育て、家に潜む危険、離乳食・沐浴体験）について満足度は高く、特に実体験の満足度は高かった。



②プレママ・パパワークショップ：

城南保健福祉センターとの共催にて、6月と

11月に2回開催した。また、開催状況はTVQ九州(6月)、ケーブルテレビJ:COM(11月)で放映された。参加者は42名で、97.6%が「大変満足」「満足」と回答していた。自由記載の内容には「体験型の赤ちゃんとの触れ合いやお母さんからの実体験の話はとても役に立つ」「父親同士の交流会は貴重だった」「夫婦のコミュニケーションは大切に、今から育児に備えて2人で準備していきたい」等、プログラム内容の効果を評価できる記述が多く挙がっていた。



③ハイリスク児を出産した母親の抑うつ・不安傾向、育児困難、赤ちゃんの気持ちに関する探索研究

対象：福岡大学病院総合周産期母子センター新生児部門に入院中の新生児を出産した妊産婦で本研究の調査票記入にあたり説明を行い、同意した妊産婦。福岡大学医に関する倫理審査委員会の承認（2018M097）を得た。現在までの症例数は、多胎を含む14例で、妊娠34週以後の出産である。「エジンバラ産後うつ病質問票」得点は、出産直後が高い傾向にある。抑うつとされる9点以上の症例は1例、8点2例、7点2例であり、出産直後又は1週間後が高値であった。「赤ちゃんの気持ち質問票」得点分析から赤ちゃんを身近に感じる事がやや困難であることがわかった。

《調査項目とスケジュール》

調査項目	早期	1W	2W	1M
1) 妊産婦の背景	○			
2) 児の状況・状態(本人の把握内容)	○	○	○	○
3) エジバ産後うつ病質問票	○	○	○	○
4) 赤ちゃんの気持ち質問票		○	○	○
5) 不安になりやすさの調査 STAI	○	○	○	○
6) 分娩・産褥期・新生児の状況	○			
7) 具体的な不安や悩み	○	○	○	○
8) 医療者周囲に支援してほしいこと	○	○	○	○

2) 子育て期における支援の実施計画

①福岡市保育園等職員に対する食物アレルギー児の対応についての理解を図る事を目的に開催した。308名出席で、73%が「非常に参考になった」と回答していた。自由記載の内容には「医師による説明でわかりやすく安心した」「実際にエピペンを用いて感覚がわかった」アナフィラキシー対応DVD(ブランディングチームにて作成)に対して「非常に参考になった」という意見が多くみられた。医療者による研修会のため、本物のエピペンを使用し、作成したDVDにより、実際に保育園での緊急時対応のイメージができるなど効果がみられた。

②「福岡市健康安全研修会」を共同開催し、【基礎編】【実践編】【振り返り】を行いシミュレーション研修の段階的な研修の評価を行った。福岡大学医に関する倫理審査委員会の承認(2018M077)を得て行った。

【基礎編】福岡市内の保育所等に勤務する保育士、看護師を対象に体調不良の子どもの手当て、保育所における事故防止について講義を行った。研修には294名の参加があり、研修の満足度では90%が満足との回答を得た。【実践編】では、シミュレーター(Sim junior)を用いて、「保育中に子どもがけいれんを起こした場合の対応」についてシミュレーション研修を行った。実践編には84名の参加があった。参加者全員が研修について満足したと回答しており、「けいれん対応のシミュレーションで自分の園に足りないと感じた」「園に持ち帰り園内研修でロールプレイングして連携を深めていきたい」などの感想が得られた。参加者は、今回の研修で園内での緊急時の体制整備や研修の必要性を実感していた。

3. 研究発表

1) 子どもの緊急時における保育所等保育士・

看護師の対応の現状：第25回日本保育保健学会(2019年5月・神戸)。

- 2) 保育所等の保育士・看護師に対する緊急時の対応技術習得のための段階的研修の効果：第66回日本小児保健協会学術集会(2019年6月・東京)
- 3) 「子どもといる生活支援」として大学の施設を活用し地域に開かれた体験型両親・祖父母学級の実践報告：第60回日本母性衛生学会学術集会(2019年10月・東京)
- 4) 地域と大学の連携・協働による「初産婦夫婦への妊娠期からの子育て支援」実践報告：第60回日本母性衛生学会学術集会(2019年10月・東京)
- 5) Implementation and evaluation of a parent preparation support program for primiparous couples : 23rd East Asian Forum of Nursing (2020年1月・タイ)

4. 外部評価に対して改善を図った内容

1) 保育時間内における事故も多発する中、医療機関との連携による研修として実施している「福岡市健康安全研修会」の【基礎編】【実践編】【振り返り】と、新たに2019年度「福岡市アレルギー研修会」を実施した。小児科医師・看護師・養護教諭が企画運営し、福岡市のすべての保育園(認可・無認可含む)の保育士及び看護師等の公的研修となっている。

2) 保育士にとってのシミュレーション活用による研修の有効性について、「福岡市健康安全研修会」【振り返り】研修の参加者は少人数で実施しており、令和元年度においては2月15日開催予定のため昨年度実施状況と合わせて今後検討していく。

3) 研修者による自園での研修報告(園内研修)の実施展開できるプログラム作成について、今回モデルとして1園で、ブランディングメンバー参加のもと実践編参加者が自園にて、シミュレーションを実施した。実際の園にて、けいれん発生を想定することで、構造上の問題や役割分担など実際、誰がどのように動けば良いかなど考える事ができた。

4) 母親の孤立化を防ぐため、妊娠期の振り返り調査の継続と、プレパパ・ママ参加者の出産後の追跡調査においては、進捗はみられない。